

WoodSciCraft 2014

小幡谷英一（筑波大学生命環境科学研究科）

去る9月8日から12日の5日間、南仏のモンペリエにおいてWoodSciCraft 2014（Wood Science and Craftsmanship: Cross perspective between Europe and Japan）が開催されました。このシンポジウムは、伝統的な木工芸に関わる日仏の職人と、木材加工に関わる日仏の研究者が一堂に会し、様々な知見を共有しようとするユニークな企画で、笹川日仏財団、フランス国立研究機関（CNRS）、欧州科学技術機構（COST）等の支援により実現したものです。フランス（76名）を中心に、14か国から130名以上が参加しました。日本からは、木工芸や漆工芸、楽器製作に携わる第一級の工芸家が招かれ、名古屋大、筑波大の木材研究者も講演者として参加しました。フランス以外ではチェコからの参加者が最も多く（19名）、日本からの参加者は15名でした。

<http://woodscicraft2014.lmgc.univ-montp2.fr/index.html>

期間を通じて、午前中は口頭でのセミナー、午後は様々なワークショップが開かれました。セミナーでは、第一線で活躍されている木材研究者が、生長応力の発生機構（名大・山本先生）、日本の伝統建築（名大・山崎先生）、老化に伴う色の変化（名大・松尾先生）など、木材に関する幅広いテーマについて講演を行いました。上越教育大・茂手木潔子名誉教授からは、日本の伝統的な和楽器の紹介がありました。また、東京文化財研究所の松山直子博士には、日本における伝統技術（無形文化財）の保全制度について解説して頂きました。ワークショップでは、数寄屋大工の立中正樹氏、轆轤師・木地師の綾部之氏、仏師の矢野健一郎氏らによる伝統的な木材加工の実演が行われました。また、漆工芸師の建田良策氏による漆芸の実演や、石田克佳氏による琵琶製作過程の紹介も行われました。

海外の方は、日本の工芸の緻密で繊細な手法だけでなく、その背景にある哲学（木の味を活かす、侘び寂びを重んじる、など）に強い感銘を受けたようです。一方、フランスの大工や工芸家、楽器製作者により、手斧による広葉樹材の製材、伝統的な旋盤工芸、弦楽器の塗装などの実演が行われ、日本ではあまり知られていないフランスの伝統工芸を間近で見ることができました。

伝統的な木工芸には木材の特性がうまく活かされたものが多く、また、職人の方々が直面している様々な問題には新たな研究テーマにつながるものもあり、研究者にとっては非常に意義深いシンポジウムでした。一方、職人の方々も、研究者との意見交換によって様々な疑問が解消したり、木材に対する感覚を他国の職人と共有したりと、得難い経験をされたようです。日仏の職人が「そうそう、そうだよ」と談笑している様子を見て、このシンポジウムが成功したことを確信しました。

日仏英語が入り混じるため混乱が予想されましたが、多言語に通じたモンペリエ大のグ
リル先生や、ボランティアで通訳を下さった在仏日本人の方々のおかげで、有意義な
意見交換ができました。

次回の **WoodSciCraft** は、2年後に日本で行われる予定です。多くの方々に参加して頂き、
日仏間の文化交流、技術交流が益々盛んになることを祈っています。